

『露日単語集』に基づく 18世紀薩隅方言のエ列音

駒 走 昭 二

キーワード：露日単語集，薩隅方言，エ列音，ゴンザ，ロシア語

要 旨

18世紀前期の薩摩漂流民が著したとされる『露日単語集』には、エ列音が「e」「b」という2種類の文字で記されている。本稿では、この2種類の文字について、その使用状況と、当時のロシア語正書法、現代薩隅方言の実態等をもとに考察し、本資料のエ列音表記が次のような音韻論的特徴を示していることを指摘した。すなわち、語頭の「エ」ならびに「ケ」「セ」「テ」「ネ」「メ」「ゲ」「ゼ」「デ」「ベ」に2種類の音節が存在していたということである。そして、その各音節の2種類のうち少なくとも1種類は、口蓋性を備えていたと考えられる。このことは一地方の方言史に止まらず、日本語音韻史の解明に有効な既存の資料を解釈する上でも、重要な意味を持つものと考えられる。

1 はじめに

日本語の音韻史において、現代語のエ列音「ケ」「ヘ」「メ」「ゲ」「ベ」に相当する音節は、古くは2種類の音節が存在していたが、8世紀末には一つに統合したというのが通説になっている。また、ア行とヤ行の「エ」も10世紀中頃には統合し、この統合された音節が、13世紀中には、ワ行の「エ」をも吸収したとされている。しかし、日本語の音韻史が指す日本語の範囲は決して定かではない。そのことが、エ列音の統合の現象自体はともかく、具体的な音価やその音価推移の時期の問題を複雑にしているように思われる。地方語の音韻史は、記録の乏しさ故に、見逃されがちではあるが、中央語とは質の異なるエ列音の歴史がそこにも存在していたはずである。

本稿では、薩摩漂流民ゴンザ^{注1}が著したとされる『露日単語集』の表記を通して、18世紀前期薩隅方言のエ列音について考察する。本資料には、現代薩隅方言の「エ」に当たる音節や、「ケ」「ネ」などに当たるエ列音節の母音の部分に2種類の文字「e」「b」が使われている。各文字の使用度数は、「e」が232例、「b」が151例である。これらの文字の使い分けが意味するものについて^{注2}考えてみたい。

2 日本語表記に見られる使い分けの特徴

まずは、本資料中での「e」「b」の使用例を観察し、その特徴を指摘する。考察は、「e」「b」の各文字が、それぞれ単独音節として用いられている場合と、子音文字と結合して用いられている場合とに分けて進めていくことにする。

2.1 単独音節の場合

単独音節として用いられている場合、すなわち現代薩隅方言の「エ」に当たる音節を表示していると思われる例は、「e」が41例、「b」が7例存在する。まずは、その使用例を以下に示すことにする。^{注3}

・「e」の例 (計41例)

ено мѣжо (エノミョジョ/宵の明星), тоетафиѣй (トエタフィヨイ [とえた日和]/静かな日和), Фаено каже (ファエノカジェ [南風の風]/南風), екъротасата (エクロタサタ [酔い喰らうた沙汰]/酩酊), мино етатъ (ミノエタト [身の焼いたと]/肉焼), еда (エダ/枝), какъе (カケエ [掛絵]/聖像), саенъ (サエン [菜園]/庭園), шивоѣе (シオイエ/塩入れ), уе (ウエ/上) 他

・「b」の例 (計7例)

ѡбукъ-ро (エブクロ [餌袋]/胃袋), ѡкъре (エキレ/疫癘), ѡншу (エンシュ/煙硝), ѡкакъ (エカキ/絵描き), ѡтта (エツタ/靴屋), ѡтта (エツタ/皮革業者), ѡ (エ/家)

用例を通覧してみると、「e」と「b」では、その使用環境に違いがあることに気づく。「e」が、語頭でも語中語尾でも環境を選ばず使用されているのに対し、「b」の方は、語中語尾では全く使用されず、語頭でのみ使用されているのである。これらの環境ごとの使用度数を表にして示すと表1のようになる。

表1 単独の「e」「b」

	語頭	語中尾	計
e	5	36	41
ь	7	0	7
計	12	36	48

2.2 子音文字と結合している場合

次に、子音文字と結合して用いられている場合、すなわち現代薩隅方言の「ケ」「セ」などに当たるとされる場合について見てみる。用例数は「e」が191例、「b」が144例である。以下にそれらの使用例を挙げる。

・「e」の例 (計191例)

шеке (シエケ/世界), каже (カジェ/風), камънаре (カミナレ/雷), банмадже (バンマヂェ/晩まで), ототе (オトテ/一昨日), асачче (アサッチェ/明後日), менечъ

(メネチ/毎日), фесо (フェソ/臍), ясе (ヤセ/野菜), деконь (デコン/大根) 他
 ・「ь」の例 (計144例)

Фолокъ (フォドケ/仏), Фкагъ (フカゲ/日陰), уамъ (ウアメ/大雨), камьнокъ (カ
 ミノケ/髪の毛), Фигьнашъ (フィゲナシ/髭無し), мунь (ムネ/胸), цумь (ツメ/
 爪), нько (ネコ/猫), дьклекъ (デクレク [歴々]/主人), конабъ (コナベ/小鍋) 他
 紙幅の都合により、全用例を挙げる事ができないので、上に挙げた例からだけで
 は、ややわかりにくいのが、ここにも注目すべき特徴が確かに存在する。「e」が比較的ど
 の子音文字とも満遍なく結合するのに対し、「ь」は子音文字のうちк, нь, м, г, д, б
 としか結合していないのである。ここでは、それぞれが結合する子音文字の用例数を表
 2として示すことにする(便宜上、母音と結合したときの発音も、現代ロシア語に基づいて
 片仮名で示す)。

表2 「e」「ь」と結合する子音文字の用例数(日本語)

ロシア文字	к	с	ш	т	ч	н	ф	м	р	л	в	г	ж	д	дж	б	計
片仮名転写	ケ	セ	シエ	テ	チェ	ネ	フェ	メ	レ	レ	エ	ゲ	ジエ	デ	ヂエ	ベ	
e	22	7	29	17	26	9	9	9	11	1	1	12	14	11	7	6	191
ь	48	0	0	0	0	50	0	31	0	0	0	9	0	1	0	5	144

3 先行研究

この「e」と「ь」の問題については、村山七郎(1965)に指摘がある。

「ë (ロシア字 ь。今は用いず) と e (ロシア字 e) とは可なり厳密に区別されている。本来の日本語のエ列音の母音はëで表わされ, ai, oi から発達した音は e で表わされëが用いられるのは例外的である。(中略)しかし, 例外が無いわけではなく, 「紅差指」は bensa/ib' (ベンサシイビ), 「五年」は gonenn (ゴネン) であり, また「言葉に」kotobani>kotobai が kotobë (会話序文) である。また口蓋化した子音の後ではëではなく, e が書かれる。「手」če (チェ), 「船頭」fendu (シエンドウ) など。(中略) ゴンザにあつては, e は ai, oi から発達したものが圧倒的に多く, 他方, ë は日本語古来のエ列音母音を表わすのに用いられ, 従つて, ë は e よりも狭い母音を表わしたと見られる。」

確かに、「e」の用例を通覧してみると、ai, oi から発達したものが多いことがわかる。前に挙げた使用例からも、その傾向は明らかである。しかし、村山も指摘しているように例外も存在し、その数は決して少なくない。例えば、「ye (ウエ/上)」や「вагамае (ワガマエ [我が前]/自分)」、また、「фесо (フェソ/臍)」や「фебъ (フェビ/蛇)」などの使用例があり、これらは《本来のエ=ь》《ai, oi から発達したエ=e》という規則では説明できない。また、なぜ、口蓋化した子音の後では、この規則が適用されない

のかも不明である。これらの問題が存在する以上、まだこの問題の本質は完全に解明されたとは言い難い。そして、そもそも、各「エ」が、ai, oi から発達したものであるかどうかという歴史的事情と、18世紀前期薩隅方言という共時態の音韻を考えることは、密接な関係があり参考にしなければならない部分もあるが、基本的には質の異なる問題ではあるまいか。^{註4}ここで注目しなければならないことは、本資料中、複数見られる「フォドケ [仏]/神」の「ケ」は必ず「кѣ」で表示され、複数見られる「ドケ/何処に」の「ケ」には必ず「ке」が表示されていて、両者が決して混用されていないということである。そして、その他の「не」と「нѣ」, 「ме」と「мѣ」等においても同様の使い分けが見られるということである。

4 ロシア語の正書法

4.1 『露日単語集』におけるロシア語の正書法

本資料は、ゴンザ自身が直接記したものなのか、或いはゴンザは日本語訳を発音しただけで他に記録者がいたのかどうか定かでないが、いずれにしても本資料が、かなりロシア語に精通した人物の手によって書かれたことは、この記録の精密さから推して明らかである。そうすると、前述した文字の使い分けには、ゴンザの発音の違いが反映されているというだけでなく、ロシア語の正書法が影響している可能性もある。

そこで、本稿で問題にしているロシア文字「e」「b」の使用に関して、本資料の記録者がどのような規範意識を持っていたのかということロシア語の部分から探ってみることにする。因みに、本資料のロシア語の部分と日本語訳の部分の記録者が同一人物であることは、筆跡から明らかである。

「e」と「b」は、ロシア語の部分でも、それぞれ多数用いられている。そしてそれらの全用例を、前述した日本語の部分の特徴に照らし合わせながら見てみると、次のような興味深い事実を指摘することができる。

- ① 「b」は、一部の例外を除いて、語頭や、母音の後で用いられている例は見られず、そのほとんど(233例中230例)が子音文字の後で用いられている。^{註5}
- ② 「e」は、語頭・語中語尾に関わらず、また前接する文字が子音・母音文字に関わらず、多数用いられている。
- ③ 「e」が比較的どの子音文字の後にも続くのに対して、「b」は前接する子音文字に偏りが見られる。両者に前接する子音文字の用例数を一覧表にして示すと表3の通りである。

以上が、本資料のロシア語の部分における「e」「b」の文字使用の特徴であるが、これこそが本資料の記録者が有していた規範を示すものと言えるのではなからうか。

表3 「e」「ь」に前接する子音文字の用例数(ロシア語)

前接子音	б	в	г	д	ж	з	к	л	м	н	п	р	с	т	ф	х	ц	ч	ш	щ	計
e	10	55	4	64	28	21	0	41	18	33	22	81	43	42	1	0	3	56	25	18	565
ь	17	40	0	21	0	2	1	49	35	13	16	15	8	9	0	0	4	0	0	0	230

4.2 グレーニングの正書法

本資料のロシア語の部分における前述のような規範は、当時の文法書からも裏付けられる。当時のロシア語文法の記述として最も高い水準にあるとされているグレーニングの文法書『ロシア文法すなわち Grammatica Russica またはロシア語の基礎的な手引き』には、文字「e」「ь」に関して次のような記述がある。ここではその要点とその記述が見られる部門番号を示す。^{注6}

- (1) 「ь」は i と e という二個の母音字からなっている。(I § 10)
- (2) 「ь」は二重母音であり、「e」は単純な母音である。(I § 55)
- (3) 語頭にあるか、或いは母音の後に続く場合の「e」は、「ь」と同じ、つまり、i と e の両方からなる二重母音として発音される。(I § 55)
- (4) 「ь」は2つの動詞 *бды* (乗っていく)、*ьму* (食べる) と、その派生語以外には語頭に立たない。また、その2つの動詞も「ь」が語頭に立つ重要な理由があるのではなく、単に慣用に従っているだけにすぎない。(I § 56)
- (5) ж, ф (あるいは θ), х, ч, ш, щ の文字の後では、「ь」ではなく「e」を用いなければならない。例えば, *честь* (尊敬), *жесть* (ブリキ), *шерсть* (羊毛), *щека* (頬骨) など。(I § 56)

このようにグレーニングの記述は、前述の『露日単語集』のロシア語の部分における文字の使い分けの特徴とよく合致する(①と(4)、③と(5))。このことから、前述した本資料のロシア語の部分における文字の使い分けの特徴は、単なる偶然ではなく、ロシア語の正書法規範として明らかに存在していたものと考えられる。

5 日本語表記に見られる文字使い分けの解釈

これまで本資料の日本語表記に見られる文字の使い分けの特徴と、ロシア語の正書法を見てきたが、ここでは、それらがどのような関係にあるのかを考えてみる。そしてその関係を踏まえた上で、文字の使い分けが何を意味するのかということを探ってみたい。

5.1 単独音節の場合

5.1.1 語頭の場合

まず、単独音節として語頭で用いられている場合、すなわち語頭の「エ」について考

えてみる。前述したグレーニングの記述(4)から、当時のロシア語の正書法では、ごく一部の例外を除いて《語頭では「b」ではなく、「e」を用いる》という規範が存在していたことがわかる。そして、本資料の記録者もこの規範に従っていたことは、前に挙げたロシア語の部分の特徴①から明らかである。本資料のロシア語の部分において、「b」が語頭で用いられている例外的な3例のうちの2例が、グレーニングが挙げる例外的な単語「бдуとその派生語」にあたる「бэжу(乗る)」「бду(乗り物で乗っていく)」であることから、この規範意識は、かなり明確なものであったろうと推察される。それでは、このような規範意識を持った記録者が日本語の部分では、語頭の「エ」をどのように記したのであろうか。表1で示したように、日本語の部分では、語頭において、「e」だけでなく、「b」も用いられている。日本語という外国語なので、グレーニングの記述にあるような「慣用」に従ったということはある得ない。そこには規範に抵触してまでも、両者を使い分けて記さなければならなかった、明らかに異なる2種類の音節が存在したと考えるのが自然ではなからうか。おそらく、ロシア語においては、グレーニングの記述(3)にあるように、語頭の「e」と「b」の発音の区別がなくなってしまうので、そのため語頭では表記を「e」に統一しつつあるが、「e」と「b」は本来、異なる発音を表す文字のはずで、発音が異なりさえすれば書き分けるべきものなのであろう。グレーニングも前掲書の中で次のように述べている。

「どこにeではなく、むしろbを書くべきかについては、まだ都合よく決定することはできない。このことは専ら発音にのみ存しているのである。その語がどのように発音されるかをよく注意する以外には、語中のどこにbあるいはeを用いるべきかを知る、いかなるよい方法もない。」(I § 56)

ここで、もう一度使用例を見てみよう。

「b」の例は、「エブクロ(餌袋)」「エキレ(疫癘)」「エンシュ(煙硝)」「エカキ(絵描き)」「エッタ」2例「エ(家)」の6種7例である。一方、「e」の例は、「エノミョジョ(宵の明星)」「エクロタサタ(酔い喰らうた沙汰)」「ミノエタト(身の焼いたと)」「エダ(枝)」「エクロタトント(酔い喰うたのと)」の5例である。

後者の例は、「エダ(枝)」を除いて、「ヨイノミョジョ」「ヨイクロウタサタ」「ミノヤイト」「ヨイクロウタトント」から転じた語であることは明らかで、「e」の該当箇所は「ヤイ」>「エ」,「ヨイ」>「エ」の変化を経た音であることがわかる。

このような明確な使い分けは、この2文字の違いが、一時的な表記の揺れではなく、ゴンザの発音の違いによっていることを示している。

前述したグレーニングの記述(1)(2)から判断すると、「b」は、[je]のような音を表しているものと推察される。これは現代薩隅方言において、高齢者が「映画」や「鉛筆」の語頭の「エ」を、[je]と発音することと合致するものである。一方、「e」は、単母音[e]を表しているということになる。

これらの推察は、ロシア語と世界の言語を対照させた P. S. パラスの『欽定全世界言語比較辞典』^{注7}の記述からも支持される。彼は、「e」については「ギリシャ語のイブシロン、他の言語の E」とし、「b」については「頭にイオータを伴った E」としている。これは、「e」が [e]、「b」が [je] ということとほぼ同義であろう。

しかし、本資料の「e」の場合、もう少し検討を要する。それは、「e」の使用例には、村山 (1965) が指摘するように、[ai] [oi] から転じた音が多いとはいえ、それらが全て [jai] [joi] から転じた音であるからである。[ai] > [e]、[oi] > [e] という変化が生じて、半母音 [j] が存在している以上、ロシア文字「e」の音価が単母音の [e] であるとは考えにくい。ここでは、[j] の存在を認めた方が無理がない。そして、このように考えれば、「エダ (枝)」の「エ」に、[ai] [oi] から転じた音ではないにも関わらず「e」が用いられていたことも理解できる。「枝」の「エ」は、本来、ヤ行音であり、また現代薩隅方言においても、高齢者の間では、半母音 [j] を伴って発音されるからである。ゴンザの発音においても「エダ (枝)」の「エ」は、やはり半母音 [j] を伴った音だったのではなからうか。この推察は、当時のロシア文字の音価とは多少異なることになるが、日本語を表記する際、最優先されたことは、2文字の絶対的な音価ではなく、相対的な対応であったと考えられるので、このようなことも当然あり得ると考える。

さて、このように推察してくると、今度は、語頭において、「ヤイ」「ヨイ」からではなく、[アイ][オイ] から転じた「エ」はどのように表記されているのかということが問題になってくる。しかし、本資料中にはそのような例が見られない。ゴンザが著した別の資料『新スラヴ・日本語辞典』^{注9}には、「会いつく」「追いつく」を表したと思われる例が見られるが、「会いつく」は、外来語に用いる文字「э」^{注10}を使用して「эцукъ (エツク)」と記し、「追いつく」の方は、「エ」に転じることなく「ойцукъ (オイツク)」と記している。そして他には該当例が存在しない。語頭で「アイ」「オイ」から転じた「エ」が異常なほどに少ないという事実が単なる偶然に過ぎないのかどうかは現時点では判断しかねるが、いずれにしても「アイ」「オイ」から転じた単独音節の「エ」を「e」で表記した例は存在せず、本資料の「e」が半母音 [j] を伴わない単母音の [e] を表しているとは考えにくい。

つまり、本資料の日本語の部分で、語頭に見られる「e」「b」はいずれも、単母音の [e] ではなく、半母音 [j] を伴った音であると考えられる。そして、両者の違いは、口蓋性の強弱に依るものであり、グレーニングの記述(1)(2)と本資料の使用例から総合的に判断すると、「e」が口蓋性が弱い [e]、「b」が口蓋性が強い [je] のような音を表しているのではないかと考えられる。

現代薩隅方言では、語頭の「エ」は常に [je] であるが、「エサツ<アイサツ (挨拶)」など、[ai] より変化した「エ」は [e] である。『露日単語集』からは単母音 [e] の音

価を持つ「エ」を確認できなかったが、語頭「エ」の複数の存在自体は、18世紀前期から現代に至るまで続いていると言える。^{注12}

5.1.2 語中語尾の場合

次に語中語尾の「エ」について考えることにする。この場合は表1からもわかるように「e」の例しか見られない。このことから、ゴンザの発音では語中語尾において1種類の「エ」しか存在していなかったと考えられる。なぜなら、もし、2種類の音節が存在していれば、語頭の場合と同様に、文字によって書き分けていたはずであるのに、そのようになっていないからである。

但し、前述のグレーニングの記述(2)や、P. S. パラスの記述に従って、この「e」が単母音の [e] を表しているものと判断するのは早計である。ここでは文字が1種類しか存在しないため、ロシア語の正書法が厳密に守られているもの、換言すれば、ロシア語正書法に反して表記しなければならない事情が日本語の発音に存在しなかったものと考え、グレーニングの記述(3)にあるように、「e」は「b」の本来の音と同じ、すなわち [je] であったと考えるのが穏当であろう。

現代薩隅方言においては、大部分が [je] であるが、「ウエ(上)」「マエ(前)」など、^{注13}単語によっては [e] となるものもある。18世紀前期には、確固としていた語中語尾の「エ」の発音が、近年、揺れ始めているということであろうか。

5.2 子音と結合して用いられている場合

ここでも、まず、前に挙げた本資料のロシア語の部分の特徴とグレーニングの記述から、本資料の記録者が有していた規範を探ってみることにする。前述したように、「e」「b」と、前接する子音との関係について、ロシア語の部分の特徴③とグレーニングの記述(5)は合致している。このことから、本資料の記録者は「b」は、ж, ф, х, ч, ш, щ の文字の後では用いることができない」という規範を有していたと考えられる。そしてこの規範が、日本語表記の部分にも及んでいるのである。前に示した表2がそのことを物語っている。つまり、日本語表記に見られた、「b」は子音文字к, н, м, г, д, бとは結合するが、それ以外の子音文字とは結合しないという特徴は、ロシア語の正書法の規範に従った結果だったのである。

しかし、表2における ж, ф, ч, ш の空白はその規範によるものだとしても、制約を受けるはずのない c や r などが「b」と結合していないのはなぜかという問題は残る。そして、逆にкやнのように「e」と「b」の両方と結合する子音文字が存在するのはなぜかということも明らかにしなければならない。

まず、к, н, м, г, д, бが「e」と「b」の両方と結合することに注目してみる。これは前述の、語頭の「エ」の場合と同様に、それぞれ2種類の音節が存在していたと考えるのが自然ではなかろうか。つまり、ゴンザの発音においては現代薩隅方言の「ケ」

「ネ」「メ」「ゲ」「デ」「ベ」に相当する音節に、2種類の音節があったのではないかということである。

この2種類の文字は、語頭の場合と同様、表記または発音の揺れや、異音の関係にある2つの音を表したものではない。なぜなら、前述したように、単語によって、「ケ」「ネ」「メ」「ゲ」「デ」「ベ」を「e」で表示するか、「b」で表示するかが決まっており、ごく一部の例外を除いて混用されることがないからである。そして、「e」で表されたエ列音と「b」で表されたエ列音との間に、両者が棲み分けるような音声環境の違いが全く認められないからでもある。

また、「e」と「b」は意味の弁別に関わっていた可能性も高い。「e」と「b」には最小対の表記が存在するのである。例えば「менокъ (メノケ/眉)」と「мьнокъ (メノケ/睫毛)」、¹⁴「ке (ケ/權)」と「къ (ケ/毛)」である。これらの音声的環境は全く同じであり、意味の弁別は「e」と「b」の発音にのみ依っている。

以上から、ゴンザの発音ではエ列音「ケ」「ネ」「メ」「ゲ」「デ」「ベ」に、発音が明確に異なる2つの音節が存在していたと考えられる。

次にс, ш, т, ч, ф, р, л, в, жに注目してみる。これらは「e」と結合するばかりで「b」とは結合しないので、「ケ」「ネ」「メ」「ゲ」「デ」「ベ」のような2種類の音節は存在しないと考えられそうであるが、日本語の音節との対応を考えてみたときに、必ずしもそうではないことがわかる。

例えば、現代薩隅方言で「セ」に相当する音には、本資料で「се」と「ше」の2種類の表記が見られるのである。具体例を挙げれば、「ニセ [二歳]/青年」「ヤセ/野菜」などはそれぞれ「нисе」「ясе」であり、「セ」を「се」で表示している。一方、「セナカ (背中)」「アセ (汗)」などは、それぞれ「шенака」「аше」であり、「セ」が「ше」で表示されている。また、「テ」に相当する音は、例えば、「オotte/一昨日」「アサtte/明後日」が、それぞれ「ототе」「асачче」と記されていることからわかるように、「те」と「че」で書き分けられている。「ゼ」に関しては、子音の音価から判断して「зе」と「же」での書き分けが予想されるが、「же」は、「カゼ/風」を「каже」と記しているなどの例が多数見られるものの「зе」の例は、本資料中に見当たらない。しかし、ゴンザが本資料と同時期に作成したとされる別の資料『日本語會話入門』¹⁵まで調査の対象を広げるならば、「ゼモク/材木」を「земок」と記した例が見られ、「ゼ」にもやはり、2種類の書き分けが存在することが確認できる。

つまり、「ケ」「ネ」「メ」「ゲ」「デ」「ベ」が母音文字の使い分けによって2種類の音節を表記し分けたのに対し、それ以外のエ列音は子音文字の使い分けによってそれを表記し分けたのである。但し、「へ」「エ」については母音文字によっても子音文字によっても区別が見られず、1種類の音節しか存在しなかったと考えられる。また、「レ」に関しては、「カミナレ/雷」「デクレク [歴々]/主人」をそれぞれ「камьнаре」「дъклекъ」

と記していることから、「ре」と「ле」によって書き分けていた可能性もあるが、「ле」が1例しか存在せず、また、「рь」の表記が存在し得るにも関わらず、それを採用していない点は、他の音節の書き分けとは事情が異なる可能性もあり、ここでは保留とした。

ここで各エ列音に存在した2つの音節のそれぞれの表記の仕方をまとめて示すと次の通りである。

ケ：「ке」[къ]，セ：「се」[ше]，テ：「те」[че]，ネ：「не」[нь]，メ：「ме」[мь]，
ゲ：「ге」[гь]，ゼ：「зе」[же]，デ：「де」[дь]，ベ：「бе」[бь]

但し、「デ」については、「дь」の例が1例しか見られず、「де」と「дь」による使い分けの機能が低いように感じられるが、「デ」に相当する音節には、他に「дже」という表記が見られ、これは、前掲の表2で、先取りして示したが、7例存在する。いずれも「банмадже (バンマデ/晩まで)」「содже (ソデ/袖)」など、本来の「デ」を示すものである。よって、「デ」は「де」と「дже」による書き分けもなされていたと考えられる。これは「テ」の表示に用いた「т」と「ч」のような2つの子音文字がロシア語に存在しなかったために、「д」と「л」に「ж」を後接させた「дж」によって表記し分けた記録者の工夫なのではなかろうか。「дже」と「дь」は、前者が本来の「デ」を示し、後者が「レ」から転じた「デ」を示している点で、発音に違いがあったと思われるが、「дь」の例が1例しか存在しないため、これ以上の推察は控えたい。

ここまで述べてきた表記法の違いは、それぞれの音節を区別するのが母音の違いによるものなのか、子音の違いによるものなのかということまでは包含しない。ただ、日本語を表記する手段がロシア文字であったため、その文字数や正書法上の制約から、2種類の音節を2通りの表記法で表すことになったものと考えられるのである。

次に音価について考える。まず「セ」「テ」「ゼ」「デ」の各2種類は、使用されている子音文字の音価から判断して、片方、すなわち「ше」「че」「же」「дже」が口蓋性を持つ音を表し、それぞれのもう片方が、直音を表していたものと考えられる。これは、現代薩隅方言において、「アイ」「オイ」から転じた「エ」は[e]でありながら、本来の「セ」「ゼ」が[se][ze]である地域(出水地方・大隅南部など)があることや、本来の「テ」「デ」が[tse][dʒe]^{注16}である地域(薩南地方・大隅南部など)があること等を考え合わせれば、蓋然性の高い推測だと思われる。

また、「ケ」「ネ」「メ」「ゲ」「ベ」の文字の使い分けも、口蓋性の有無を反映したものと考えるのが穏当であろう。それは、ここにも口蓋性を持つ音節が存在したと考えた方が、前述の「セ」「テ」「ゼ」「デ」と体系的に整うからであり、また、前述したグレーニングの記述から、「ь」が[je]という音を表す文字である可能性が高いからである。

現代薩隅方言にも、[nego] 猫，[fuŋe] 舟など、口蓋化した「ネ」が存在する地方

(頼娃町など)がある。その他にもかつては存在した地域があったようである。このこと^{注17}も、18世紀前期薩隅方言において、口蓋性を持つ「ケ」「ネ」「メ」「ゲ」「ベ」が存在したという推察を補強するかもしれない。現代では、一部の地域に、一部の音節にしか存在しない口蓋性を持ったエ列音が、18世紀前期の薩隅方言においては多くの音節に存在していたということではなからうか。

5.3 まとめ

ここまで、母音文字「e」「b」ならびにそれらと子音文字の組み合わせによる複数の音節表記が、エ列音の違いに対応することを述べてきた。各音節の特徴をまとめて示すと次の表4のようになる。

表4 「e」「b」と子音文字との組み合わせによる各音節の特徴

母音文字 子音文字	e		b	
	語例	口蓋性	語例	口蓋性
なし (語頭)	<u>エ</u> タ (焼いた)	+	<u>エ</u> カキ (絵描き)	++
なし (語中尾)	カ <u>ケ</u> エ (掛け絵)	++	(なし)	/
κ	ケ (權)	-	フオド <u>ケ</u> (仏)	+
c	ヤ <u>セ</u> (野菜)	-	(なし)	/
ш	セ (背)	+	(なし)	/
т	オト <u>テ</u> (一昨日)	-	(なし)	/
ч	テ (手)	+	(なし)	/
н	～ <u>ネ</u> (～ない)	-	ム <u>ネ</u> (胸)	+
м	<u>メ</u> ネチ (毎日)	-	ユ <u>メ</u> (夢)	+
г	<u>ゲ</u> ジョ (下女)	-	フカ <u>ゲ</u> (日陰)	+
з	<u>ゼ</u> モク (材木)	-	(なし)	/
ж	カ <u>ゼ</u> (風)	+	(なし)	/
д	<u>デ</u> コン (大根)	-	<u>デ</u> クレク (歴々)	+
дж	ソ <u>デ</u> (袖)	+	(なし)	/
б	サン <u>ベ</u> (倍)	-	カ <u>ベ</u> (壁)	+

6 おわりに

これまでの考察により、ゴンザの発話においては、語頭の「エ」に少なくとも2種類の音節が存在したということと、現代薩隅方言で「ケ」「セ」「テ」「ネ」「メ」「ゲ」「ゼ」「デ」「ベ」に相当する音節に2種類の音節が存在したことが明らかになった。一

部を除いたほとんどのエ列音に2種類の音節が存在し、そのうちの 하나가口蓋化した音であった可能性が高いということは、所謂日本語の音韻史を考える上でも興味深い。

エ列音、特に子音を伴ったエ列音の音価推移の時期に関しては、音価推定に有効な各種外国資料の表記が異なっていることもあり、未だ定説が得られていない。15世紀末の『伊路波』に記されていた口蓋性が、後のキリシタン資料には記されず、さらにその後の『捷解新語』等で再び記されているという事実に対して、多様な解釈が可能だからである。そこには、本稿で扱った問題と同様に、表記文字と音価の対応の問題や、日本語表記法の固定化の問題等、記録した側の問題があり、その一方で、各資料に記されている言葉を同じ日本語として一括に扱ってよいものなのか、換言すれば、そこに方言的要素は考えられないのかという記録された側の問題も関わっている。18世紀前期、薩隅方言という九州の一地方の言葉に、口蓋性を有するエ列音が存在していた可能性は高い。このことも、既存の資料を解釈する上で、また無視できないことのように思われる。

注1 『露日単語集』には、1300語の単語がロシア語と日本語の対訳形式で書かれている。ロシア語見出しはもちろん、日本語の部分もロシア文字で記されている。また、正式な書名は、『*Вокабулы преддверие разговоров японского языка*』であるが、日本では、いろいろな書名で呼ばれている。本資料の本格的な紹介を最初に行った村山七郎(1965)は、本資料を『露日語彙集』と呼んでいるが、後の村山七郎(1993)は、『露日単語集』としている。他に『項目別露日辞典』『項目別露日単語集』と呼んでいる先行研究もあるが全て同書である。本稿の筆者は、「語彙」という言葉の意味を考えたとき、「語彙集」よりも「単語集」の方が適切であり、また、本資料の規模を、ゴンザの別の資料『新スラヴ・日本語辞典』と比較したときに、「辞典」よりも「単語集」の方が適切であると考え、本稿では『露日単語集』と呼ぶことにする。

また、本資料の記録者については、議論が分かれている。本資料の表紙には、「1736年にアンドレイ・ボグダーノフの指導と監督の下、日本人によって書かれた」という意味の「*Списана 1736 году японцом под надзираниемъ сего учения Андрея Богданова*」という記述がある。しかし、田尻英三(1981)、迫野虔徳(1991)は、ロシア語の意味と日本語訳の不相当な対応に注目し、また、江口泰生(1995)は、正書法や音韻の区別に基づいた分析的な表記の実態を根拠にして、本資料の記録者はロシア人であり、ゴンザは被調査者として携わったのみという推定を行っている。一方、駒走昭二(1995)、木部暢子(2000)は、本資料の制作時点では、ゴンザはロシア語にかなり長けていたのではないかという判断をもとに、ゴンザが自ら記した可能性もあり得るという考えを示した。本稿においては、表現の煩雑さを避けるため、一応、記録者は「ゴンザ」として論を進めることにする。

なお、本稿では、九州大学文学部言語学・応用言語学研究所蔵のアカデミー本の複製本を利用させていただいた。記して感謝申し上げます。

注2 本稿の筆者は、国語学会平成7年度秋季大会(1995年10月12日 於新潟大学)において、『露日単語集』の日本語音節表記」という発表を行ったことがある。本稿は、その内

容を改編したものである。

- 注3 使用例はロシア文字のままで示し、片仮名転写と、対応するロシア語の意味も添える。また、適宜、片仮名転写の後に対応形も挿入することにする。つまり、「ロシア文字で記されたゴンザの日本語（ゴンザの日本語の片仮名転写〔ゴンザの日本語を漢字仮名交じりで表した対応形〕/ロシア語の意味）」の形で表示する。但し、ロシア語の意味が同時に対応形を兼ねる場合は対応形の表示を省略する。
- 注4 江口泰生(2001)も、この日本語の事情から導かれた規則に基づいて異例率を算出しているが、本稿の筆者は、本資料における日本語の特性は、日本語の側からではなく、まずロシア語の側から捉えるべきだと考える。それには、当時のロシア文字の音価、ロシア語の正書法、そして本資料の記録者の規範意識を把握する必要がある。これらは、当時の文法書の記述の検討と、本資料のロシア語の部分の観察を通して初めて明らかになるものである。
- 注5 例外は次の3例である。14章「ьль」, 39章「ьду, еши」, 39章「ьзжу, иши」
- 注6 【ロシア文法すなわち *Grammatica Russica* またはロシア語の基礎的な手引き】は、山口巖(1991)で全文が日本語に訳されている。本稿でのグレーニングの記述の要約は同書の日本語訳に依っている。
- 注7 ロシア科学アカデミー会員 P. S. Pallas が作成した『*Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa Augustissimae Cura Collecta*』（1787～1789）。第1巻の最初にロシア文字の音価についての説明がある。本稿は東洋文庫所蔵本に依った。
- 注8 小倉肇(2001)では、『土佐日記』において、ア行 [e] とヤ行 [je] の書き分けの異例が1例だけ存在することが述べられている。その異例が「衣た(枝)」である。単なる偶然か、あるいは「エダ(枝)」の「エ」には、他のヤ行 [je] と異なる音声的な特徴があったのであろうか。
- 注9 『新スラヴ・日本語辞典』はゴンザが著したとされる書物の一つで1736年から1738年にかけて作成された。アカデミー本の複製本(鹿児島県立図書館所蔵)に依った。
- 注10 グレーニング『ロシア文法すなわち *Grammatica Russica* またはロシア語の基礎的な手引き』の(I §49)に「эは外来語にのみ用いられ、すべての場合に子音の後の e のように発音される」とある。この記述からは、「эцукъ(エツク)」も「э」でなく「e」で表しても問題なさそうである。また、なぜこの「エツク(会いつく)」だけが外来語扱いなのかも不明である。この不可解な「э」の使用は、「アイ」「オイ」から転じた第3の「エ」の存在を想像させるが、語頭に用いられている「э」はこの1例のみであるため、詳しい考察はここでは保留としたい。いずれにしても、この「э」の使用は、「e」が単母音 [e] でないことの傍証とはなるであろう。
- 注11 上村孝二(1992)参照。
- 注12 語頭における、この2文字の音価は非常に似ていて、また、意味の弁別機能も低かったと思われる。ゴンザが後に著したとされる『新スラヴ・日本語辞典』では、語頭でのこの2文字の区別が失われているからである。この両者の区別が失われ統合した後、その隙間へ「アイ」「オイ」から転じた「エ」が流入し、現代の2種類の「エ」の区別に至ったのではないかとも考えられるが、これは想像の域を出ない。
- 注13 木部暢子(1997)参照。

- 注 14 表記が混用されている例、すなわち「e」と「b」の両形が見られるのは、「ゴネン（五年）」の「ネ」、「ヒゲ（髭）」の「ゲ」、「ナベ（鍋）」の「ベ」のみである。
- 注 15 『日本語会話入門』はゴンザが著したとされる書物のうちのの一つで、1736年に作成された。本稿はアカデミー本の複製本（九州大学文学部所蔵）に依った。
- 注 16 上村孝二(1991)参照。その他、平山輝男(1992)によれば、現代でも九州各地に、この特性は存在する。
- 注 17 上村孝二(1991)参照。奥村三雄(1991)によれば、肥前島原方言の一部でも見られるという。
- 注 18 森田武(1993)は、時代的に隔たりのある『伊路波』『捷解新語』『倭語類解』の三書が、エ列音を同じハングルで表記していることに対し、「日本語にあてるハングル表記は、先例に倣って、それで統一を図ったのではなかったか。換言すれば、ハングルによる日本語表記が固定化し、いわば日本語の歴史的仮名づかいのような伝統的なものになっていたのではあるまいか。」としている。

引用文献

- 江口泰生(1995)「『外国資料』としてのロシア資料」(『岡山大学文学部紀要』第24号)
- 江口泰生(2001)「ロシア資料のエ列音」(『筑紫語学論叢』風間書房)
- 奥村三雄(1991)「音韻の歴史」(『日本語と日本語教育 第10巻』辻村敏樹編 明治書院)
- 小倉 肇(2001)「『衣』と『江』の合流過程——語音排列則の形成と変化を通して——」(『国語学』204号)
- 上村孝二(1991)「九州方言の各県別解説 鹿児島」(『九州方言の基礎的研究 改訂版』九州方言学会 風間書房)
- 上村孝二(1992)「鹿児島方言」(『現代日本語方言大辞典 第1巻』平山輝男編 明治書院)
- 木部暢子(1997)「I総論 方言の特色」(『鹿児島県のことば』平山輝男編 明治書院)
- 木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
- 駒走昭二(1995)「ロシア資料と方言史研究」(『名古屋大学国語国文学』第77号)
- 迫野虔徳(1991)「『新スラヴ・日本語辞典』の「オ」の表記」(大友信一博士還暦記念『辞書・外国資料による日本語研究』)和泉書院
- 田尻英三(1981)「18世紀前半の薩隅方言」(『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学篇』32巻)
- 平山輝男(1992)『現代日本語方言大辞典 第1巻』平山輝男編 明治書院
- 村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館
- 村山七郎(1993)「漂流民が語る日本とロシア<インタビュー>」(山下恒夫再編『江戸漂流記総集』第6巻)日本評論社
- 森田 武(1993)『日葡辞書提要』清文堂出版
- 山口 巖(1991)『ロシア中世文法史』名古屋大学出版会

——名古屋大学大学院生——

(2003年10月16日 第1稿受理)

(2004年1月29日 最終稿受理)